

死(いのち)の時代を生きること

ホスピス・在宅ケア実践中の臨床医内藤いづみさんをお迎えして

第14回AKIHIKOの会開催

没後14年、今年も昨年に引き続き「AKIHIKOの会」を開かれた会へという観点から「第14回AKIHIKOの会」として、「死(いのち)の時代を生きること」をメインテーマに、三月二十一日(日)、東京神楽坂・日本出版クラブ会館で開催しました。

講師はお二人。一人は臨床医としてホスピス・在宅ケア実践中の内藤いづみ氏。もう一人は批評家で、わがAKIHIKOゼミ主宰の米沢慧氏。お二人は、山梨日日新聞に、生命・医療に関する「ファックス書簡」を連載中です。米沢氏が内藤氏の話を引き出



【毎日グラフ別冊】1967年4月1日号より

す形で、へいのちを取り囲む状況について、とりわけ脳死による心臓移植の道を開いた臓器移植法の施行、高齢社会、介護社会についてふれて、死も「いのち」とルビをふる時代に入ったと淡々と語りました。

続いて登壇した内藤いづみ氏は、自らが取り組むホスピス医療における事例をスライドを使って紹介、実践を通しての説得力のあるお話は、笑いあり涙あり。「がん告知」や緩和ケアのことなど、時間をオーバーするほどの質問があり、関心の高さが伺われました。

今回も遠くは北海道函館から昭彦氏の長女の佐藤純子さん、博多の大住敏子さんも駆けつけ、折りから『シャッター以前』第三号の発刊を祝して、第二部懇親会は大いに楽しい会になりました。参加者五十七名。

『シャッター以前』第三号は、昨年、第13回AKIHIKOの会の二次会で、中川道夫氏を編集長として刊行されることが決まり、実際に動き出したのは昨年秋でしたが、二十七名もの方々にご執筆ねがい、この春、漸く完成しました。今回は表紙デザインを加清明子さんにお手伝いいただき、また川島書店さんには取次店の窓口になってくださり感謝です。『シャッター以前』三号は、まだ残部があります。この本の売り上げが会の財政を支えています。ぜひ友人知人にお勧めください。

ベトナム戦争からホスピスへ

福岡と東京・葛飾で岡村昭彦写真展開催



ポスターになった写真（ピアフラ

去る四月二十日、二十五日、福

岡市中央区六本松NHKギャラリーにて、「いのちを考える写真展」が開かれた。それに先立ち、四月十八日、「いのちを考えるーバイオエシックスのすすめ」と題して早稲田大学教授の木村利人氏が講演。講演会の入場者は一八〇名、写真展の入場者は二三〇名だった。

今回の写真展の主催は、バイオエシックス研究会（代表二ノ坂保喜氏）と福岡・生と死を考える会（代表隈崎行輝氏）で、AKIHIOKOの会の大住敏子氏が、一時的な移住先である福岡の地で、偶然このお二人と出会ったことが縁となり、講演会、写真展の運びとなったのである。詳しい経緯については『シャッター以前』第三号をお読みください。

一方、四月二十九日、五月四日

まで、東京都葛飾区かつしかシンフォニービルズにおいて「岡村昭彦写真展―21世紀への遺言」が開催されました。入場者は九九二名。

今回は開催二日目の朝、主催者の白石忠男氏のこと、NHKテレビとラジオのニュースで取り上げられたため、新聞などメディアによって写真展を知った人の参加が目立った。

*

東京・葛飾の写真展では、写真に見入る若い人が印象的だった。アンケートに回答した五二九名の中から感想の一部を紹介します。

- 1) 岡村さんの作品を生で見るのは、今日が初めだった。体が熱くなった。(女・29)
- 2) 苦悶と無表情な生きる者と苦痛の消えた死者の顔が、身をおいたことはないけれど戦争の記憶として残ります。(女・30)
- 3) 継続して下さい。(男・57)
- 4) 現在のユーゴへのNATOの爆撃を悲しい目で改めて思い出します。いつも二度と戦争のないことを願っている人々が支配者のせいで犠牲になるのはたえられません。各地で開いて平和を訴えて下さい。(女・40)
- 5) 戦争の本当の姿を表わしていて、胸がいたくなる。(男・44)
- 6) 民族間の紛争や戦争に至る歴史的、政治的事情は様々で、安易な反戦主張は禁物ではあろう。しかしこれだけははっきり考え